

撰集抄 新院ノ御基讚州白峯ニ有レ之事

過ぎにし仁安の比。西国はるぐ修行つかまつり侍りし次に。讚州見を坂の林と云所に。しばらく住侍りき。深み山辺のなら葉にて。庵りむすびて。つま木こりたく山中だけしき。花の木ずえによする風。誰とへとてかよぶこ鳥。よもぎのもとのうづら。日終にあはれならずといふ事なし。長夜のあか月。さびたる猿の声を聞に。そぞろにはらわたを断侍り。かゝる栖は後の世の為としも侍らねども。心そぞろにすみておぼゆるにこそ。かくても侍るべかりしに。うき世の中には。思をとゞめじと思侍りしかば。立はなれなんとし侍りし程に。新院の御墓はか所をおがみ奉らんとて。白峯と云所に尋參り侍りしに。松の一村しげれるほとりに。くぎぬきしまはしたり。是

ならん御墓にやと。今更かきくらされて物も覚えずまの
あたり見奉りし事ぞかし。清涼紫宸の間にやすみし給
て。百官にいつかれさせ。後宮後房のうてなには。三千
の翡翠のかんざしあざやかにて。御まなじりにからん
とのみ。しあはせ給ひしそかし。万機のまつりごとを。
掌たなづゝろににぎらせ給のみにあらず。春は花の宴を專にし。
秋は月の前の興つきせず侍りき。あに思きや。今かゝる
べしとは。かけてもはかりきや。他国辺土の山中の。お
どろのしたにくち給ふべしとは。貝鐘かいかねの声もせず。法華
三昧まいつとむる僧一人もなき所に。只峯みねの松風のはげしき
のみにて。鳥だにもかけらぬありさま。見奉るにそぞろ
に涙なみたを落し侍りき。始はじめあるものは終りありとは聞侍りし
かども。未かゝるためしをばうけたまはり承うけたまはり侍らず。されば思を
とむまじきは此世なり。一天の君きみ。万乘ばんじょうのあるじも。し

かのごとくの。苦みをはなれましく侍らねば。せつり
もしゆだもかはらず。宮もわらやも共にはてしなきもの
なれば。高位かうるもねがはしきにあらず。我等もいくたびか。
彼国王ともなり給ひけんなども。隔生きやくしやうそくまう即忘そくまうして。す
べておぼえ侍らズ。只行てとまりはつべき。仮果円満ぶつかわゑんまんの
位のみぞ。床ゆかしく侍る。とにもかくにも。思つゞくるまゝ
に。涙のもれいで侍りしかば。

よしや君昔きみむかしの玉の床とことても。

からん後はなにかはせん

とうちながめられて侍りき。盛衰じやうすいは今にはじめぬわざな
れども。ことさら心驚おどろかれぬるに侍り。さても過ぬる

保元ほうげんの初の年。秋七月の比ひをい。鳥羽とばの法王ほうわうはかなくな
らせ給しかば。一天村雲むらくも迷て。花の都みやこくれふたがり侍り
て。含識がんしきのたぐひうつゝ心も侍らズ。なげき身の上にの

み。つもりぬる心地どもにて。おはしましゝ中に。僅に

十日のうちに。主上上皇の。御国あらそひありて。上

を下にかへし。天をひゞかし地をうごかすまで。乱れたゝ

かひ侍りて。夕に及て。大炊殿に火かゝりて。黒煙お

ほへりしに。御方は軍勝にのり。新院の御方の軍破て。

上皇宇治の左府御馬に召て。いづちともなく落させ給し

を。兵者追懸奉りていさゝかも恐奉らず。射まいらせ侍

つかはものをつけ

おそれ

りしを見たてまつりしに。よしなき都に出てと返々心う

く侍り。さて後にこそうけたまはりしが。新院はある

山の中より求出し奉て。仁和寺へうつらせ給。宇治左

府は。矢に当らせ給て。御命終らせ給ぬれば。奈良の

京。般若野の五三昧に。土葬し奉りけるを。勅使たち

て。死がひ実験の為に。堀おこし奉けると承はりしにあ

はれ六借世の中かな。誰か知ざるうき世はかるべしと

は。ことにあやうくはかなき身をもちて。したりかほに

のみ侍りて。むなしく明暮あけくれ過て。無常むじやうの鬼にとらるゝ時。

声をあげてさけべども叶かなはずして。悪趣あくしゆにのみ経めぐり侍

らんは。いとゞかなしかるべし。盛衰じやうすいもなく。無常も

はなれ侍らん世よのなりとも。仏の位目出度ほとけくらるめでたきと聞たてまつら

ば。などかねがはざるべき。況や盛衰はなはだしきをや。

無常すみやかなるをや。たゞ心をしづめて。往事わうじを思給

へ。すこしも夢にやかはり侍ず。悦よろこびも歎なげきも。盛さかんなるも衰おとろふるも。

みな偽いつはりのまへのかまへなるべし。